

=====

ふくしま

2015. 1. 29

復興支援フォーラムニュース No. 86

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先> 今野順夫 (tkonno67@gmail.com)

=====

食と農でつなぐー福島・女性農業者の取り組みー

岩崎由美子 (福島大学)

1. はじめに『食と農でつなぐ 福島から』(岩波新書)について

○本書の主人公は、故郷を離れての避難生活のなかで、食と農で結ぶ信頼を再生しようと奮闘し続ける女性農業者「かーちゃん」たち。福島県の浜通と中通りのはざまに広がる、平地が少ない寒冷な阿武隈地域。過疎と高齢化、市町村合併の大波に揉まれていた「かーちゃん」たちは、「農家の嫁」の位置から抜け出し、食品加工、商品開発、グリーン・ツーリズムなど地元の価値の発掘を通して、地域を担う力強い存在に変貌する途上にあった。その活動を支える山里の恵みを奪い、地域で培った信頼を断ち切った原発事故。いま、「かーちゃん」たちは何をめざし手を動かし続けるのか。支える人々は何を託そうとしているのか、被災当事者たちの肉声を紹介。

2. なぜ「かーちゃん」なのか——農村女性起業について

○政策上の位置づけと動向

- ・「新しい農山漁村の女性ー2001年に向けて (中長期ビジョン)」(農林水産省、1992)
- ・あらゆる場における意識と行動の変革
- ・女性の経済的地位向上と就業条件・就業環境の整備
- ・女性が住みやすく活動しやすい環境づくり
- ・女性の能力の向上・開発システムの整備→「農村の女性起業支援」
- ・ビジョンを実行できる体制整備

○農水省調査からみた農村女性起業の全国的動向

- ・対象 ①農村在住の女性が中心となって行う、農林漁業関連起業活動
 - ・使用素材は主に地域産物であること
 - ・女性が主たる経営を担っていること
- ②女性の収入につながる経済活動であること (無報酬の活動は除く)
農業改良普及センター経由で調査

- ・中心は、〈食品加工〉と〈流通・販売〉
- ・年間売上金額300万円未満が半数
- ・生活改善実行グループや農協女性部活動の経験を共通基盤とする中高年女性を中心
- ・いえの農作業や兼業と合わせて起業活動にも取り組む、「サイドビジネス」型
- ・グループ経営が主体であったが、現在は個人経営が上回る

○阿武隈地域の農村女性起業

	老年人口割合 (%)	農家世帯率 (%)	6人以上の 世帯数 (%)	就業者割合			主業農家率 (販売農家) (%)	農業就業人 口に占める 女性割合 (%)	基幹的農業 従事者に占 める女性割 合 (%)	農業労働力保有状態別農家数		
				第一次産業 (%)	第二次産業 (%)	第三次産業 (%)				65歳未満の 専従者のい る農家割合 (%)	60歳未満の 女性専従者 のいる農家 割合 (%)	女性専従者 のみの農家 割合 (%)
飯館村	30.6	55.5	18.1	28.0	38.5	33.5	23.2	54.2	50.5	72.1	40.3	18.7
葛尾村	32.4	59.4	15.3	35.7	29.1	35.2	21.6	54.8	51.6	62.2	34.9	18.6
福島県	25.2	13.4	6.9	7.6	29.2	60.0	18.1	51.9	46.3	52.7	20.9	14.2

・2010年農林業センサス・住基人口・現住人口調査

- ・阿武隈地域～高い農業依存度
- ・かつては稲作プラス養蚕・工芸作物（葉たばこ、コンニャク等）・畜産の複合経営が中心。養蚕の衰退により桑園の耕作放棄地が増加。工芸作物・畜産も減少傾向。近年はトルコキキョウ等の花卉、高原野菜栽培も
- ・補助事業の導入による交流施設建設（中山間地域総合整備事業等）をきっかけに、地域活性化事業を主目的とした企業組合、NPO法人等が設立。農産物直売所の運営、特産品加工、都市農村交流の展開
～女性が地域づくりの第一線に

○地域をつなぐネットワークの存在

- ・あぶくまロマンチック街道構想推進協議会、NPO法人あぶくま地域づくり推進機構
- ・産直ルート「いなかみち」

3. 食と農でつなぐー「かーちゃん」たちの取り組み

○震災、原発事故を経て、農村女性起業の担い手たちはどう動き、何を考えているのか

- ①被災前の生活・生業
- ②被災によるその激変
- ③被災避難を生き延びる
- ④原発被災があぶり出した問題
- ⑤これから、どう生きるか

→インタビュー調査により明らかにする

○本書に登場する福島県の農村女性起業事例

市町村名	名称	経営の概要
飯舘村	高橋トク子さん	キムチのほか、福神漬、梅漬など加工品開発。直売所「よってぐべ」や「まごころ」で売上NO.1。
	小林美恵子さん（体験工房老止みち・遊つるみえこ）	つる工芸、体験教室の開催。飯舘村森林組合女性部やまゆり会会長として山菜を出荷。
	佐野ハツノさん（まदै民宿どうげ）	村内で初めてオープンした農家民宿。若妻の翼1期生、前農業委員会業委員会会長が経営。
	村上日苗さん（なないろの空）	自家の自然農園作物を利用したマクロビオティックレストラン、農家民宿。石窯ピザ焼き体験、自然農体験などのメニューも。
	佐々木千栄子さん（気まぐれ茶屋ちえこ）	どぶろく特区の指定を受け、どぶろく、山の幸を活かした料理を提供。
	渡邊とみ子さん（まदै工房美彩恋人）	飯舘村の新品種のかぼちゃ、じゃがいもの作付と加工品販売。
葛尾村	松本富子さん（ふるさとのおふくろフーズ）	凍み餅、生餅、豆菓子等の加工販売。生活改善グループが母体。福島県内農村女性起業の初の法人化事例。
	葛尾じゅうねん企業組合	J A女性部が母体となり、じゅうねんの契約栽培、乾燥調製作業の受託。だんご、油、ペースト、パウダー等の加工販売。
	永沢利子さん・松本ウメさん・松本清子さん・大友美代子さん（葛尾村いきいき促進協議会）	福島市蓬萊団地との交流を目的に結成。漬け物、かぼちゃまんじゅう、切り餅、おふかし、米粉シフォンケーキなどを製造、販売。
浪江町	石井絹江さん（つしま活性化企業組合ほのぼの市）	津島地区を拠点とした農産物直売所「ほのぼの市」、農産物加工所、食用油製造所の管理運営。会員66名。
川内村	新妻幸子さん（企業組合かわうちとくさん）	梅干し、漬け物等の特産加工品等の販売、地元産ソバの飲食店経営。商工会女性部が主導、農家女性グループに参加を呼びかけ。会員46名。
川俣町 山木屋地区	渡辺文子さん	葉タバコ専業だったが、90年代初め直売所向け野菜の多品種少量生産に切り替え。漬物加工も行う。地域おこしグループにも参加、イベントでうどんやピザ作りも。

大熊町	根本友子さん（企業組合 アグリママ）	アグリママは6人の女性グループ。転作大豆の地産地消から活動はスタート。味噌加工、豆腐、柏餅、大福等品目を増やす。学校給食にも供給。2005年、企業組合を発足。
相馬市	阿部真紀子さん（農家レストラン菜の花）	元農業改良普及員で、飯舘村の地域づくりグループ「夢創塾」のメンバー。1987年の「新春ほら吹き大会」で「女性は結婚したら翼をもがれた鳥同然。でも、飯舘村の二一世紀には”村営主婦の翼”が飛んでいるはずです」という大ボラを吹き、「若妻の翼」事業実現の立役者に。農業改良普及員として、葛尾村の「おふくろフーズ」など多くの女性起業家を育てる。定年前に退職、2003年に農家レストラン「菜の花」を開業。
福島市	渡辺美紀子さん、安斉さと子さん（ふくしま女性起業研究会）	「ふくしま女性起業研究会」は、福島市内の女性農業者20あまりで結成された自主グループ。農産物の加工や販売方法、グリーン・ツーリズムなどを学び、将来的な起業の可能性を探ろうと1999年に発足。とくに熱心に取り組んできたのが「出前教室」。「食育」ではなく「食農教育」にこだわり。
福島市 立子山地区	高橋順子さん（たんがら味工房）	2004年、「ばあちゃんの手作りみそを再現したい」との思いから、立子山地区の女性農業者6名で農産物加工グループを立ち上げ。JA新ふくしま女性部が開催していた女性起業塾に参加し、近所の仲間に声をかけ、加工品づくりへの一歩を踏み出す。
福島市	須藤陽子さん（すどう農園、スローフード福島会長）	非農家出身。京都の大学を卒業後福島に戻り、二本松有機農業研究会会で1年間研修。自宅周りの畑を開墾して野菜を栽培し、農協や直売所、スーパーの地元産コーナーでの販売。やがてレストランとの提携、野菜セットの個人宅配に展開。
二本松市 東和地域	菅野瑞穂さん（(株)きぼうのたね）	有機専業農家の長女。東京の大学を卒業後、実家に戻り就農、有機農業を実践。震災後「株式会社きぼうのたねカンパニー」を設立。
須賀川市	有馬克子さん（銀河のほとり）	バブル期に外食産業に従事。友人に誘われて参加した穀物菜食の講習会で、「さもないもの」美味しさを発見。自家の米や野菜を提供する穀物菜食レストラン「銀河のほとり」を開始。目指したのはバブルの頃とは「逆行する」店づくり。
西会津町	佐藤昭子さん（(株)キノコハウス）	埼玉県の中学校で美術教師。同じく教師をしていた夫の故郷である西会津町に移住、脱サラ就農。ハウスで菌床シイタケ栽培を開始。デザートジャムや野草茶な

		<p>ど様々な加工品の開発やキクラゲ生産も新たに始め、2010年には「株式会社キノコハウス」として法人化。</p>
--	--	---

4. まとめにかえて

○被災からの協同的再生

- ・被災者による被災者支援
- ・被災者と支援者の「入れ替わり」
 - ～「作り手と食べ手の気持ちが一致した」（五十嵐裕子さん）
- 「きちんと測定してあるものは安心して子どもに食べさせることができる」という消費者からの声
 - ～一方的に「支援される」側であった避難者が、食の安全・安心へのこだわりという自らの信念に基づき能力を発揮することで、「支援する側」へと転換
 - 避難した女性農業者の活動を、避難先である地域社会の女性が支え、そこから生み出される食が、放射能汚染への不安の中で暮らす地域社会の住民を支える
- ・食と農への信頼、「つなぐ」ことへの希望

○被災地発のコミュニティ・ビジネス

- ・飯舘村の「まideaな復興計画」（第5版）でも「村民主体の事業起こし」が検討の焦点に
- ・地域のニーズと個人の技能・技術を組み合わせる事業
- ・もう一つの働き方（オルタナティブ・ワーク）
 - ～地域に暮らす人々が、自分の固有の能力を発揮しながら、他者との支え合いを通して自らの存在意味や生きがいを実感できる働き方
 - 利潤追求最優先化へのオルタナティブ

○「消費される農山村」から「対等、公正な交流」へ

- ・伝える、語る、女性たちの思い
 - 地域に対する愛着、こだわり、思い、哀切、覚悟→深い共感と感動
- ・交流～人の人生に関わろうとする姿勢
 - 目の前にいる生身の人、人生の大切な一部分を共有し、学びあうこと
- ・都市との交流の目的は、都市住民が「客」として農村地域資源を一方的に「消費」し、農村側は都市住民を「お客様」としておもてなしをするところにあるのではない
- ・来訪者とともに地域の価値を再発見し、生活文化の価値を共有。それらに支払われた対価は、農村地域資源の「切り売り」の対価ではなく、地域維持のための再投資の費用

農村/都市、生産者/消費者の関係を耕す→被災地からの提案

（主な参考文献）

塩谷弘康・岩崎由美子『食と農でつなぐ 福島から』（岩波新書、2014）

第83回ふくしま復興支援フォーラムでのご意見等

2015年1月15日 A0Z で、第83回ふくしま復興支援フォーラムを開催しました。

鈴木浩氏（明治大学客員教授・福島大学名誉教授）から「第3回国連防災世界会議と福島の復興」について、報告を受けました。30名の方が参加し、活発な質疑応答がありましたが、会場で提出されたご意見等は、以下の通りです。

~~~~~

★ 「誰でもアクセスできる情報プラットフォーム」「住民参加の合意形成」のしくみづくりが、今回の原発災害の教訓として必要であることが、良く分かりました。従来の行政―住民間の体質をどういうところから変えていけるのか、意識して考えたいと思います。（N.K）

★ 政府の復旧・復興政策で、「ふるさとの復興」と「被災者一人ひとりの生活再建」とは、明瞭に異なることを指摘されていて、勉強になりました。（Y.S）

★ 初めての参加となりますが、原発事故、避難状況、仮設住宅、地域コミュニティなど、広範な課題、ご賢察をとりあげいただき、また、実際の政策・対応、動きについで、大変わかりやすいお話でした。ありがとうございます。（T.I）

★ 被災自治体が策定している「復興ビジョン」、「復興計画」等の実現の難しさの背景が、良く理解できました。（K.F）

★ 東日本大震災をはじめ、多くの自然災害を経験してきた日本において、防災意識をどのよう高め、主体性を養っていくかが、重要な課題であると考えます。（S.M）

★ 本日は、本当に素晴らしかったです。大変勉強になりました！ありがとうございます。（F.F）

★ 福島の農業復興について調査しています。避難指示の解除や除染、住民の帰還など、さまざまな問題が絡み合っていて、農業も迷路にはまり込んでいるように感じます。原発事故によって断ち切られた、さまざまなつながりを取り戻す「もやい直し」が必要だと、お話を聞いて改めて思いました。ありがとうございました。（W.Y）

★ 歴史を学び、これからのことを自分のことを考えて、行動していくようにしましょう。（Y.I）

★ 今の時点で、今後の方向を改めて考えることは、非常に重要だと思います。その点で、極めて大切なポイントを頂き有益でした。より具体的な話しも伺いたいと思いました。（M.S）

★ 双葉町の住民に対し、地上権や定期借地権について勉強することが必要との指摘は至言と思いました。法律や権利を自分たちのものにするために。（K.H）

★ とても内容が濃く、勉強になりました。このフォーラムの中で、町づくりについて話し合ってみるのも面白いのではないかと思います。（H.S）

★ 原発災害のあまりにも深刻な状況の中で、何をどのように取組んでいけばいいのか、戸惑うことも多いのですが、今わかる特別な課題と使命について、なるほどと思うことが多くありました。爆弾を抱えている福島原発について、初動期にどのような対応が必要なのか、あるいは、居住権のとらえ方、みなし仮設の問題、住民と行政の合意形成の大切さなど長期にわたる復興に向けて、ひとりひとりの生活再建の視点で、当面できる行政への働きかける課題を整理したいと思いました。(Y.A)

★ 国連防災会議が仙台で開催され、分科会にしろ福島で開催されないことを残念に思っていました。今般、原発事故被災地の福島で、原発災害からの再生に向けてを中心にワークショップを開催することにされた鈴木先生のご尽力に敬意を表します。(R.N)

★ 周囲で話題になっていた国連防災会議の背景が知れて、大変有難かったです。公式イベントに誘われており、当惑しておりました。関連事業が色々あってややこしいですね。総本山の鈴木先生に教えて頂き、主旨が公式イベントの実行委レベルでも全く理解されていないことは残念だと思いました。(ex) 国際地域女性アカデミーin 東北 (A.C)

~~~~~  
【予告】第85回フォーラム 2015年2月12日(木) 18:30~20:30

「葛尾村の復興への取り組み」(仮題)

報告者: 芥川 一則 氏 (福島高専教授/都市経済学)

会場: 福島市アクティブシニアセンター「AOZ (アオウゼ)」視聴覚室
~~~~~

【予告】第86回フォーラム 2015年2月26日(木) 18:30~20:30

「トラウマに弱い方々の理解と対応~大震災を中心として」

報告者: 星野 仁彦 氏 (福島学院大学大学院教授/精神科医)

会場: 福島市アクティブシニアセンター「AOZ (アオウゼ)」視聴覚室  
~~~~~

【予告】第87回フォーラム 2015年3月18日(水) 18:30~20:30

「OECD東北スクールの取組み ~ふくしまから新しい教育の創造~」

報告者: 三浦 浩喜 氏 (福島大学教授/美術家教育学)

会場: 福島市アクティブシニアセンター「AOZ (アオウゼ)」大活動室1
~~~~~

【予告】第88回フォーラム 2015年3月26日(木) 18:30~20:30

「原発事故と予防衛生」

報告者: 田中 正敏 氏 (福島県立医大名誉教授)

会場: 福島市アクティブシニアセンター「AOZ (アオウゼ)」大活動室1  
~~~~~